



大方あかつき館報

第14号
2008年3月発行

あかつき

回想

黒潮町立図書館協議会委員 池本 幸子

お腹は満たされ蒸し暑い気だるい昼さがりは、ボウーとし横になっていて時が今の私にとっては、至福の時だ。専業主婦になって早いもので、四年目を迎えるようとしている。

最近年齢の所為なのか、それとも時間の束縛から解放されたが故のリズムの乱れなのか？三度々々の食事作りがおっくうに感じてしまう。自分一人なら何でもええわで済ませてしまうところだけど、そうはいかない。側には大切な人が居る。おまけに朝食、昼食、夕食

の時間設定も確か。その度に、「どんなメニューがええ？」と、聞く。「何でもええ」と…私の想定内の返事。又しつこく聞く。

「そしたら食べたい物は何？」と、「これと言つて食べたい物がない」と…決して病弱な身体ではない。健康大好きな夫。なのに食べたい物がないとは!!そんな真夏のある日、近くの最量店に買い物に行った。そこにはあふれんばかりの食材に囲まれながら、私のように、戸惑い迷う主婦の生気のない会話が漏れてきた。「毎日のおかずで困るねえ…食べたいものがない」と…いつからだろう。この聞き慣れた会話が日常的に交わされるよ

うになったのは…何かが変。それもその筈。年がら年中お祭り、お盆、大晦日、お正月の料理が四季をとわず山積みされている。この現象には、人間の五感も狂ってしまうのだろうか。今、最高のご馳走だと思つて取る手にも喜びがない。そんな時、成長盛り、食べ盛りの食欲さ!!あの美味しさをもう一度取り返したい!!とあの時代に向かつて手まねきする自分がある。人間つて実に不可解で、そんな身勝手な自分と向き合いながら、昔のいいとこどりの想い出に酔いしれて回想する。

庭には打ち水、むしろを敷く。丸いちゃぶ台に大家族が輪になる。それだけでも、もう心は満たされていた。おかずは夏の定番カボチャ、熱いご飯の上にカボチャをつぶし、フウフウ言いながら食した事。日の出から日暮れまで海や川を駆けめぐった彼女にとって、カボチャは最高のおかずであつたと同時に、栄養源でもあつた。とにかく美味しかった。又お寿司やソーメンは、お祭りやお盆でしか食べられず、ソーメン汁は鶏を煮だしたギラギラした甘いかけ汁。肉や脂とは縁遠い身体にとっては、要求を満たすに

は十分であつたのでしよう。又今も尚、脳裏に焼きついて忘れられないのが大晦日、お正月に食べた分厚い脂身の食感。豚肉鍋。格別の美味しさだった。

当時はどこの家にも家畜を飼っており、隣近所五、六世帯の家主が寄り集まり、一番まるまる太った豚を見定めその一頭を落す。そして分け合う。我が家の軒下にぶら下がったあの肉の塊は、まさにブランド豚肉ではなかったかと……もちろんこうしたしきじきの節目は、衣食住全てに宿っており衣服も、祭り着、よそ行き、普段着と区別されていました。

衣服にも忘れられないときめきの想い出があります。五年生の時初めて買ってもらったお祭り用の水色のフレアーワンピース。そのお祭り着は毎夜枕元に寝かされ、当日をどんなに待ちわびたことか。いよいよ今日はお祭り。お姫様気分でお宮様の石段を登り上ったその時、瞬時に吹いた風が、フワッと私のスカートを持ち上げふくらませ、思わず両手でスカートを押えた瞬間何んとも言えない、あのときめき感!!そう十数年後に見たあの物女優の名場

面と重ね合せ何度も感動と、ときめき感を味わった事でした。時として自然のいたずらは、私の心のひだにこれ程までに深く刻まれていた事に、今さらながら驚かされる思いです。

又一方、遊びの世界でも自然はたくさんのお知恵を授けてくれました。5cm四方のガラスの破片は、たいへんな宝物でした。夏の草花を摘み採っては土を掘る。その中に花を置きガラス版で蓋をし、その後土で覆う。翌朝ワクワクしながら土を掘り起す。土の中では、摘み採った時と同じ乱れぬ花の姿が!!翌日も又その翌日も花は美しく咲いていた。土から上る蒸気と、花の命のしずくが自らを守るかの様にガラス版には水滴が……折られても尚美しく咲き続けようとする色とりどりの花に心動かされた事でした。物資不足ゆえに自ら創り出した数々の遊びの出会いはいは多くの感動や心の豊かさを育んでくれました。同時に私達世代は、多人数の塊り。一クラス五十三名が肌と肌を触れ合わせ五十三色の心模様を知り得る事が出来た事は、今となつては、貴重な財産を身に付けさせていただいたものだ、大自然

と、包容力に満ちた地域の目、飢餓の社会にありがとう!!の乾杯を心の底からおくりつづけている私です。

第九回 予土交流会を終えて

上林文学館協議会委員長 野並 浩

十月二十七日(土)、大方あかつき館1Fレクチャーホールに、西南四国歴史文化研究会の会員並びに地元の有志の方々が一堂に会して、表記の交流会が開催されました。

この研究会の主旨は、西南四国の歴史・文化の研究と交流を深め、愛媛と高知の両県が交互に年一回の会場を設けて開催し、地域文化の向上に寄与することにあります。

当日の日程及び内容

■開会行事(一〇:〇〇～一〇:三〇)

司会 林 一将

(交流会実行委員会委員長)

・開会の挨拶

会長 緒方 真澄

(西南四国歴史文化研究会)

・歓迎の言葉

副委員長 小野 義広

(交流会実行委員会)

「大方地域の歴史について」

・連絡

事務局長 宮崎 章弘

(交流会実行委員会)

■講演(一〇:三〇〜一二:〇〇)

演題 望郷の作家・上林 暁

―その生涯と業績について―

講師 上林暁文学館協議会委員長

野並 浩

■文学館見学(一三:〇〇〜一三:四〇)

・企画展 上林暁と熊本

「上林暁 人と作品」

上林暁顕彰会副会長 宮川 昭男

■生家等見学(一四:〇〇〜一五:〇〇)

・案内

上林暁顕彰会監事 野並 猛彦

ここで、私の講話の一端を記してみたい。

最初に上林暁(本名・徳弘巖城)さんの生いたちや、上林さんと私の出会いを父(武雄)を介して、私が旧制中学校の頃に知ったこと等を紹介しました。

続いて、戦後文学の傑作の一つに数えられている名作『聖ヨハネ病院にて』を、私の朗読を通して上林さんの温かい人柄や妻への深い愛情を作品の場面から取り上げてみました。

場内はシーンと静まり、耳を傾けて聴き入ってくれたことが印象深く残っています。

次に、敗戦の混乱の中で上林さんがふる里に熱い想いを抱いて綴った小説『年少の友』のことを、妹睦子さんの『ふるさと』(上林暁研究第三集)から引用して述べました。

「兄は最晩年になってから、もう三つ小説を書くことがある」と言っていた。

それは同じふるさと人が題材であった。(略)三人共、東京の大学に在学中、多少なりとも兄を頼りにして、家に入入りしていた。兄もまた、この年少の友を頼りにしていた。(略)共に先の戦争で、

相ついで戦死してしまった。

その中の一人が絶筆となった『秀夫君』である。(略)

片時もふるさとを忘れなかった上林さんの望郷の想いを伝えたことでした。

最後に昭和文壇に不朽の名作を残した上林暁さん。その上林さんを十八年間に及ぶ献身的な介護と口述筆記で支え、上林文学を大成させた妹睦子さんのことも語り、拙い講話を終えました。

ところで、会場を後にした一行は土佐西南大規模公園に建つ『蠣瀬川懐郷』と刻まれた上林さんの碑の周辺を散策しました。

「文学碑と向かい側の色づき始めた臥牛山、見る程に心が落ち着くね。」ある参加者の感想です。



平成18・19年度の催し風景

上林暁文学碑除幕式

2006年5月14日(日)に文学の道づくり事業の一環として黒潮町内の土佐西南大規模公園体育館前で上林暁文学碑の除幕式がありました。県内外から54名の出席者があり、ご遺族の方、上林暁顕彰会、黒潮町教育委員会の代表者による除幕が行われました。



第九回上林暁忌俳句大会

2006年8月27日(日)に第九回上林暁忌俳句大会が黒潮町保健福祉センターで開催されました。

松林朝蒼先生を講師にお迎えして、近隣市町村から63名の参加がありました。



第八回上林暁忌短歌大会

2007年8月5日(日)に第八回上林暁忌短歌大会が黒潮町保健福祉センターで開催されました。県内外から116名の出詠者があり、短歌会には60名を超す参加がありました。香川県在住の歌人、玉井清弘氏には『短歌の楽しさ』と題した講演と、参加者の作品の講評をしていただきました。

